

2004年10月20日

## ディケンズ・フェロウシップ日本支部 ニュースレター

2004年度総会は、快晴の10月3日(日)、大手前大学において日本ギaskell協会との合同大会の形で開催され、ディケンズとギaskellを論じる多彩なプログラム(研究発表、シンポジウム、特別講演)が実行された。二つの学会が合同大会を開くことは「革命的」な出来事であり、とかく孤立し自己満足的になりがちな学問に新しい風を入れる絶好の機会となった。川本皓嗣学長が挨拶の中で「小説の醍醐味といえば19世紀のイギリス小説にまさるものはない」と述べられたそのイギリス小説を代表する2人の作家の、魅力、相互関係、文学的特徴が、大会プログラムの中でくわしく論じられ、大きな成功を収めた。合同大会を立案された松村昌家氏、および Shelston 教授ご夫妻の招聘を実現された両学会関係者のご尽力に感謝を申し上げますとともに、今後は2作家に限らず、イギリス小説の深さと魅力を論ずる合同大会が次々に企画されることを願いつつ、大会の幕は閉じた。参加者はほぼ70名であった。

研究発表 10:50

第1室 ディケンズ・フェロウシップ日本支部 司会 植木研介(広島大学)

1. 中島彰子(大手前大学大学院)  
「Hard Timesにおける Sissy Jupe の役割」
2. 玉井史絵(同志社大学)  
「The Old Curiosity Shop—都市と農村、そして帝国」

第2室 日本ギaskell協会 司会 林 芳子(神戸女子大学)

1. 宮丸裕二(早稲田大学非常勤講師)  
「小説化される人生—伝記作家としてのギaskell」
2. 金丸千雪(九州女子大学)  
「Cousin Phillis における身体と言語:「他者」の役割」

シンポジウム 13:00 「社会小説家としてのディケンズとギaskell」

ディケンズとギaskellが活躍する1840年代、1850年代は、工業化のもたらす精神的、経済的影響が労働者の生活苦と相まって“condition-of-England” question をクローズアップさせ、社会不安と暴動の危機が叫ばれる時代であった。「社会小説家」としての両作家にはどのような特徴と相違が見られるかを4名の講師に語ってもらった。

司会・講師 西條隆雄 *Dombey and Son* を中心に (甲南大学)  
講師 足立万寿子 *Mary Barton* を中心に (ノートルダム清心女子大学)  
講師 田中孝信 *Hard Times* を中心に (大阪市立大学)  
講師 閑田朋子 *North and South* を中心に (日本大学)

西條氏はディケンズの社会小説として *The Chimes* (1844) を取り上げ、時代の風潮である貧民無用論にたいして「一大鉄槌」をふりおろすべく、為政者の貧民蔑視と功利思想の無慈悲さを糾弾する作家の姿を作品の中に追う。しかし社会批判に重きをおくと作品が二分してしまう弱点を持つことに気づいたディケンズは、次の大作 *Dombey and Son* において金銭社会の批判を作品の構成に従属させ、社会小説の代表作ともいえる *Bleak House* では、社会を“A Chancery World”としてとらえ、その欺瞞と無責任を徹底的に暴きつつ、作品全体は重厚で格調の高いものに保っていることを指摘する。

足立氏は「社会小説家」としてのギaskellを、転落女性の救済に見る。作家は転落女性をどうかして助けたいという思いと、女性をもてあそぶ男性に対する怒りをプロットに巧みに隠して Esther (*MB*), Lizzie (“Lizzie Leigh”), Ruth (*Ruth*) を描く。前二者はほとんど現実世界の苦悩から抜け出すことはできないが、Ruth の場合は作家のキリスト教的愛他精神が如何なく発揮され、チフスに倒れた、かつては自分を捨てた男性を看護して一命を取り留めるものの、自分は感染して命を失う、転落女性の更正が美しく、感動的に描かれている。ここに作家特有の干渉主義的態度を指摘する。

田中氏は *Hard Times* (1854) の「事実と想像」という通説的解釈を離れ、近年の批評傾向を反映して作品を「男性」対「女性」という観点から分析し、『北と南』との比較検討を通して、本作品の魅力や、社会

がある程度「女性化」することの必要性を、極端なまでの男性支配が潜め持つ混沌・カーニヴァル性を浮き彫りにすることで、リアリズム上の欠点にもかかわらず弱められることのない力強さで訴えた点にあるとする。

閑田氏は *North and South* (1855) と *Hard Times* において労使間争議の扱い方がどのように異なっているかを論じた。*Hansard, Annual Register* 等の史的文献や同時代の文学作品の中に用いられる労働組合やストライキの扱い方を、実際に用いられた用語とを比べて、ディケンズがステレオタイプな人物を誇張によって読者に訴えるのに対し、ギaskellはモデルを(天候ですら)忠実に作品の中に取り入れる。1850年代に北部で慈悲心を持った工場主が増加する傾向が見られたが、ディケンズの作品に現実の変化が反映されないのに対して、ギaskellは Thornton のような工場主を描き出してゆく。

発表後に質問が相次ぎ、またクエイカー教徒の工場主がとりわけ人道的な考えを実践し、マンチェスター近辺にその例をたくさん見ることができることも指摘していただいた。

## 総会 15:15

【支部長挨拶】本年度は春季大会をイギリス大使館で開催し、総会は日本ギaskell協会との合同大会を開いて、従来の大会のイメージを多少変えてみたのが特徴といえるであろうか。春秋ともに充実したプログラムを組むことができ、支部の活発さが十分に窺われたように思う。近年は *Dickensian* に会員諸氏の論文がつぎつぎに掲載され、堀正広氏がマクミランから英文著書を発表され、数名の会員が国内外で文学博士号を取得された。喜ばしい限りである。来春の名古屋大会では Dr. Alan Dilnot (Monash University, Australia) の来日講演が予定されているし、今夏には Prof. Malcolm Andrews より「Dickens Fellowship 国際大会を日本で開いてほしいとの声があるが、考えてみてはくれないか」との打診を受けた。国際的に支部の存在が認められはじめた証と受け止めていいであろう。ディケンズを楽しみ、また支部活動は国際的なレベルを維持しながら、ディケンズ理解を深め支部を盛り立ててゆきたいと思う。

### 【総会議事】

#### (1) 2004年度会計報告・監査報告

別紙のとおり田中財務理事による会計報告および松村監事による監査報告があり、2004年度決算は満場一致で可決された。 【可決】

引き続き、2005年度の年会費については、多少の赤字が見込まれるものの、本年度と同じ6,000円に据え置くことが提案され、了承された。 【報告了承】

#### (2) 役員改選について

役員改選時(2005年10月がこれに当たる)に、常に1名の例外扱いが出るのを避けるため、佐々木理事(2000.10 - 2004.9)は2004年度末で理事を退く。後任は選出せず、2005年度は役員14名の体制で運営する。 【可決】

#### (3) ディケンズ・フェロウシップ国際大会について

【提案】日本における大会開催の可能性について検討してよいかどうかをおはかりしたい。難題は、例年の参加費内で開催できる会場の選定であろう。予定は既に以下のように決まっているので、開催するとしても3~4年後となる。

2005 Canterbury July 28-August 2

2006 Amsterdam July 27-31

2007 Philadelphia July 19-24

【提案了承】

#### (4) 諸報告

a. 『年報』27号は3校を経て今月下旬に刊行・発送の予定。

b. 来年度の春季大会は名古屋大学において6月11日(土)に行います。宿泊および愛知万博についてのインフォメーションは次をご参照下さい。

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/dickens/spring.html>

c. 『ディケンズ鑑賞大事典』(案)の現状

原稿はほぼ出揃い、現在改稿および翻訳をお願いしている段階です。あらたに Angus Wilson, "Dickens and Dostoevsky" (1970) を加えたいとの提案を受け入れ、翻訳の著作権交渉をしていたところ、10月初旬に許可が下りましたので、早速翻訳に取り掛かっています。

講演 16:15

司会 松岡光治 (名古屋大学)

講師 Professor Alan Shelston (University of Manchester)

シェルストーン氏は「鷺と鳩—ディケンズ、ギaskell夫人、そして19世紀中葉における出版文化」と題した特別講演で、これまで対人的に論じられたディケンズとギaskellの関係、1850年代の出版文化を踏まえて捉え直された。具体的には(1)ディケンズが『ハウスホールド・ワーズ』の寄稿者としては例外的にギaskellを特別扱いしたこと、(2)この雑誌での『北と南』の週刊連載が編集者と作家という両者の間に軋轢を生じさせたこと、(3)産業問題から女性の精神的成長に関心を移したギaskellが、作家としての市場的価値を認識し、ディケンズおよび週刊連載から離れていったこと——が詳述された。

懇親会 18:00

47名が参加し、松村昌家氏が司会を担当する中、井出弘之氏の乾杯の音頭と川本皓嗣学長、Shelston教授の挨拶をうけて、楽しい交歓の語らいが始まった。両学会の会員が相互に親睦を深めあう、いい懇親会となった。

#### お知らせ

- 1 2005年度(2004.10~2005.9)の年会費6,000円を同封の振込用紙にて12月末日までにお支払い下さいますよう、お願いいたします。
- 2 『年報』28号の原稿(論文、書評、エッセイ)を募ります。投稿規定は『年報』に記載された通りです。
- 3 “Mr Dick’s Kite”(No 67)をお届けします。なお、ディケンズ・フェロウシップ国際大会に関するご意見、ご助言をどしどしお送りくださいますよう、お願いいたします。

以上